

大平学校が輩出した豊富な人材

1979年12月、中国を訪問した大平正芳首相の発案で、中国における日本語学習の促進に協力するという約束が日中間で交わされた。外務省と国際交流基金（ジャパンファウンデーション）が中心となって、1980年8月に日本語研修センター（中国での正式呼称は「中国日本語教師培训班」が北京語言学院（当時）内に設けられた。そして、5年間で計10億円のODAを注ぎ込み、中国の全域にわたる160校以上の大学から594人も日本語教師が日本語研修を受ける交流プロジェクトに参加した。

このプロジェクトは、中国での日本語人材の養成という切羽詰ったニーズを満たしたばかりでなく、日本にとつてこれまでみられないほどの規模で知日派を効果的に育成した。

日中両方のニーズを満たしたというこ
とで、同プロジェクトは中国で高く評
価された。

日本語研修センターまたは中国日本語教師培训班という正式な名前はほとんど使われることがなく、研修を受けた人間も中国の政府関係者も、同センターを「大平班」と呼んでいた。日本語に訳せば「大平学校」となる。いうまでもなく、これは発案者の大平正芳首相にちなんだ呼び名である。現在、中国のどこに行っても、日本語教育の現場では必ずと言っていいほど、「私は『大平班』の何期生だ」と誇らしげに自己紹介する日本語教育の専門家や教師に出会う。

2001年、大平学校の1期生として、私は大平学校を出て20年という年に、当時大平学校で教鞭をとっていた



もう ばんふ ●上海市生まれ。上海外国語大学日本語学科卒業。同大学講師を経て、85年に来日。修士・博士課程を修了後、知日派ジャーナリストとして活躍し、政治経済から文化にいたるまで幅広い分野で発言を続け、「新華僑」「蛇頭（スネークヘッド）」といった新語を日本に定着させた。主な著書に『蛇頭』『中国全省を読む地図』『新華僑』『日本企業がなぜ中国に敗れるのか』『これは私が愛した日本なのか』『日中はなぜわかり合えないのか』、編訳書に『ノーと言える中国』など

もう ばんふ
莫 邦富
作家、ジャーナリスト

大平学校を ご存じですか

終了から20年、
卒業生の歩みをたどる



北京在住の大平学校第1期生たち。1980～85年に実施された、日本語教師が日本語研修を受ける交流プロジェクトは、発案者の名から「大平学校」と呼ばれた。卒業生は中国各地で、日中交流の重要な担い手となった。左から王彦花氏、秦明吾氏、筆者、曹大峰氏、劉金才氏

日本人教師らを取材し、『中央公論』4月号に「『大平学校』を思い起こせ」というレポートを掲載した。

今年は、大平学校がスタートして25年、終了して20年である。この記念す

20年前の訪日スケジュール表

青島空港に降り立った私たちを出迎えたのは、青島市外事弁公室の対外広報担当者姜 永良さんだ。市内に向かう車のなかで、私が訪問目的を説明すると、「大平学校はなかなか有名な交流プロジェクトだと聞いている。いまの中国で日中交流に一番汗を流しているのは、ほとんどが大平学校の卒業生ではないだろうか」と感想を述べてくれた。同行の国際交流基金関係者を姜さんに紹介し、「実はこの大平学校の運営に一番かかわったのが国際交流基金だ」と説明した。ところが、姜氏は国際交流基金についてまったく予備知識がなかった。

青島は副省級市のなかでも最も輝く都市として知られている。ちなみに、副省級市は15あり、日本の政令指定都市に相当し、中央政府から比較的自由に各種政策を決定できる権限を与えられている。その涉外担当者が国際交

流基金を知らないのは、まず本人の勉強不足だと言えよう。同時に、中国における国際交流基金の存在感にも問題があると感じた。

べき年に、私は国際交流基金の関係者たちと一緒に大平学校の卒業生を追って、北京、青島、深圳、重慶を訪れ、卒業生たちの今日を取材し、日中交流のあるべき姿を探し求めた。

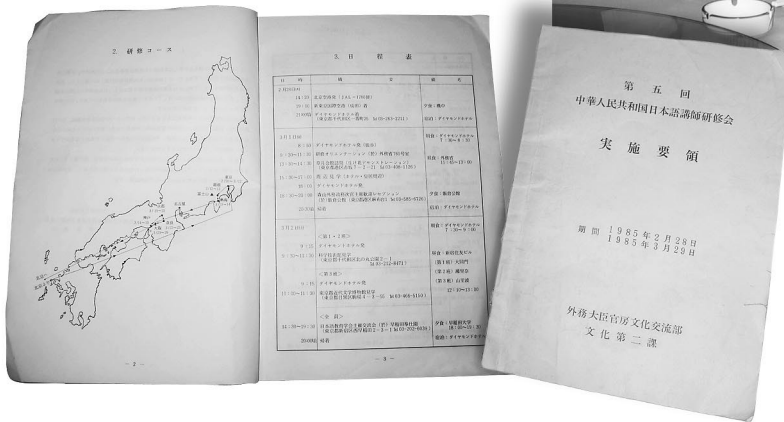
姜氏の上司に当たる外事弁公室の副主任・李汝敏氏は、実は大平学校の5期生だ。1988年まで山東テレビで6年間にわたって日本語講座の講師を務め、山東省の日本語教育に大きく貢献した一人でもあった。89年から山東省半島対外開放弁公室、95年からは青島市外事弁公室など、政府の涉外窓口の担当者として第一線で働いている知日派である。

李さんとは仕事関係で何度も会っており、ノーネクタイでどうぞ、と親しげに食事に誘われた。再会を喜ぶ握手を交わしたあと、李さんは「大事なものを見せてあげましょう」と言って、カバンからある冊子を取り出した。表紙を見て、私は息を飲んだ。85年、彼

が大平学校の研修生として訪日したときのスケジュール表だった。李さんは目を細めて笑った。「いまでも大事に持っているよ。あなたが来るから昨晚探し出した」。



↑日本での思い出を部下に語る李汝敏氏(右)
←李氏が大切にとっていた大平学校の研修期間に行なわれた日本研修旅行時の実施要領。詳しい旅程が記されている



李さんも追憶に浸っていた。「あのころ、中国は窓を開けて世界を見ようと言っていたが、どう見たらいいのかわからなかった。空港に着いたとき、外に出る勇氣もなかった。町を歩く日本人を見て、その歩くスピードの速さにびっくりした。あのころ、中国は日本を先生として見ていた。貪欲に日本から何もかも吸収しようとしていた。歩き方一つにもいろいろ考えさせられた」

しかし、話題が今日に変わると、李さんは涉外経験が豊かなだけに、言葉を慎重に選ぶようになった。「大平学校卒業生の名簿をつくる、という知らせをこの間もらった。だが、私は返事していない。『研究方向と現在の仕事』という欄がある。教育現場を離れた私には、現在の研究方向をどう書けばいいのかわからない。名簿作成側は大平学校卒業生を日本語教師という狭い分野に限定して考えているようだ」

卒業生たちの活躍舞台をもっと広く捉えるべきだと暗に批判している。私のかねての主張を援護射撃するかのように出たこの発言に、「私もまだ連絡先を提出していないよ」と思わず手を叩いた。

予想外の影響の広がり

大平学校は日本が中国につくった最大の人的山脈だ、とこれまで私はメディアで何度も強調している。しかし、今度の取材訪問でその影響力の広さに驚き、これまでの自分の捉え方がいかに狭かったかを思い知らされた。

深圳大学で日本語を教えている王洋助教教授とU F J銀行深圳支店の副支店長を務める奥さんの程路穎さんと、深圳で24年ぶりに再会した。程さんは上海外国語大学の後輩でもあり、とも

に旧友の再会を喜んだ。

同じ大平学校の1期生だった王さんとは思いついに事欠かなかったが、驚いたことに、その大平学校の話題を程さんとも共有できた。よくよく話を聞くと、王さんが大平学校で勉強していたとき、程さんも大平学校の授業を1週間ほどめぐりで傍聴していたという。王さんが持ち帰った大平学校の教材や資料などもほとんど丁寧読んでいた。それでも気がすまず、学会参加のために北京に出張したときなどの機会を利用して、その後も大平学校に潜り込んで授業の一部を傍聴した。

程さんの口から、佐治圭三や阪倉篤義など大平学校の研修生がよく知っている先生の名前が次から次へと出てくる。大平学校が当時、日本語教師たちの心のなかでどれほど輝く存在だったのかを改めて知ることができた。

大平学校の研修を終えた王さん夫婦たちは、やがて日本思想史の中国紹介に力を入れた。そして、家永三郎氏の『日本文化史』を翻訳した。丸山真男氏にも心酔した。『日本の思想』など丸山の代表作を中国に翻訳・紹介しよ



大平学校第1期生の王洋深圳大学文学院日語系主任・助教教授(右)と、夫人でU F J銀行深圳支店副支店長の程路穎さん(左)。大平学校卒業後、夫婦で家永三郎や丸山真男の名著を翻訳。出版を試みた

うとした。「丸山さんの著作を読んで、戦争反省に対する見識の高さに心を打たれた。文化大革命がなぜ起こったのかをまだ根底からは反省していない中国の現実には照らして、日本の戦後思想史の紹介の必要性を痛感した」と、程さんが翻訳の動機を振り返る。

しかし、余暇の時間を利用して王さん夫婦が翻訳した家永三郎氏の『日本文化史』は結局、出版されることはなかった。インフレが深刻な80年代後半だったため、50000元ほどの出版助成金を出さないと、専門書の出版に対して出版社はあまり相談に応じてくれなかったという。程さんは悔しがる。

「当時、もし今日のように国際交流基金とコンタクトを取れる状態にあったら、多くの中国人がもつと日本の戦後



思想に触れることができたはずだ。そうすれば、あの戦争に対する日本人の考え方ももうすこし広く理解されていなくてもいい

重慶の四川外国語大学で長年教鞭をとり、定年退職した楊霞斐さんにも会った。同じく24年ぶりの再会だ。四川外国語大学で日本語学科を創立した

功労者である楊さんはいま、夫とお手伝いさんの3人で、重慶郊外の一戸建てに住んでおり、悠々自適の生活を送っている。

私と同じく大平学校1期生なので、同じ記憶を共有できた。日本研修訪問中、新宿の紀伊國屋書店で特別に取り計らってもらい、開店前30分間の時間を利用して、1期生は支給された書籍代で好きな本を購入した。楊さんはそのとき、自分のためだけでなく、ジャーナリストの夫・傅宗正氏のために、元スポーツニッポン新聞東京本社社長牧内節男の著作『新聞記者入門』を購入した。

だが、傅氏は妻からお土産でもらったこの本が読めない。そこで楊さんに3カ月の日本語特訓を受け、のちは独学で1年かけて本を中国語に訳し、さらに出版まで漕ぎつけた。妻への愛情とはいえ、ここまで徹底的にやる夫もすごい。私は興味津々でその動機を尋ねた。

傅さんはすこし照れながら、当時の気持ちを見せてくれた。

「妻がわざわざ私のために日本から買ってきてくれた本だから、ぜひ読みたいと思った。そしてもうひとつ、動機

大平学校第1期生の楊霞斐さんと夫で元ジャーナリストの傅宗正氏。楊霞斐さんは重慶の四川外国語大学に日本語学科を創立した功労者。同学科で定年まで教鞭をとった

があった。当時、近代化の実現を目指す中国は日本を手本にしていた。社会制度が異なっても、日本はマスコミの分野でも中国の先を進んでいた。日本のジャーナリズムの現状が知りたい、そのよさに学びたいと思った。おかげさまで本は出版後、再版するほど好評だったよ」

さらに、翻訳を通して身につけた日本語力も家族の絆を強くしてくれたと傅さんは強調した。

「わが家では、妻だけでなく、日本の会社に就職した息子も嫁も日本語ができる。日本語がわからないと、私は家庭内で疎外されてしまう。幸い、この

北京日本学研究センターの苦悩

大平学校の跡を受け継ぎ、国際交流基金及び中国教育部双方の協議によって、1985年に北京外国語大学内に北京日本学研究センターが開設された。その事業の一部は北京大学でも実施されているが、今回の訪問は同センターに限定した。

今年で設立20年を迎えた同センターは、中国ではハイレベルの日本研究人材を養成する重要な拠点のひとつになっている。2005年7月現在まで、

本の翻訳を通して、私も日本語がある程度わかるようになった」

深川の程さんにしても、重慶の傅さんの関係もないはずだった。しかし、自分の夫または妻が大平学校で勉強したことで、彼らも日本と深く結ばれた。これは、私がこの取材の旅を始める前にはまったく予想していなかったことだった。当時の中国人の勤勉さも評価すべきだが、何よりもあのころの日本には、いま消えかかっているある種の輝きがあった。そのため、彼らはほとんど無条件でその輝きに強く惹かれたのだと私は思う。

センターで養成された学生数は、大学院修士課程が20期生までで415名（うち修士学位取得者18期生まで329名）、国費留学博士課程が15期生まで60名（うち博士学位取得者16名）、北京日本学研究センター博士課程13名（うち博士学位取得者6名）、在職日本語教師修士課程が4期生までで32名（うち修士学位取得者8名）、日本語研修コースが15期生までで395名である。なお、その教育支援のため、国際交流

基金はこれまでのべ489名の専門家を同センターに派遣している。

現在は、文教学部文学部の白井啓介教授がセンターの日本側主任教授を務めている。

センターは設備的には申し分がないほど立派だった。しかし、

学生があまりにも少なく、活気はいまひとつ感じられない。大平学校時代の図書館の賑わいを知っている私は、ある種の寂しさを覚えた。徐一平主任が留守中なので、曹大峰教授が主任代理として、白井教授とともに私たちを温かく迎えてくれた。曹さんも大平学校の1期生で、日本研修旅行中はずっと私と同じ部屋で寝泊りしていたルームメイトでもあった。

ひと通り、センターの概要をうかがったあと、いまの中国におけるセンターの位置づけに話題が移った。赴任し



↑北京日本学研究センター図書資料館。11万冊の蔵書数をもち、中国の日本研究の拠点としては最大最良の資料を誇る
←訪日研修時にルームメイトだった曹大峰北京日本学研究センター教授（左）と筆者



て2カ月の白井教授は、センターの研究テーマがいまの中国のニーズからちよつと離れているのではないかと印象を述べ、「学生を募集しようと思つても、昔ほど集まらなくなつた。在職修士を養成するニーズがだんだん低くなり、これからは学生に新しいメニューを提供しなければならぬ」と強調した。

中国の気映画『古井戸』『芙蓉鎮』『紅いコリヤン』などを日本に紹介した実績をもつ白井教授の指摘は核心に迫っていると思う。

曹さんも素直に悩みを打ち明けてくれた。「北京日本学研究センターは、これまで王勇（浙江工商大学日本語文化学院院長）さんのように優れた研究者も養成したが、学生数30人という現在の規模では教職員の人件費もまかなえない。現在、センターの卒業生で日本語教育と関連のあるところに就職できる者は半分以下。センターとしては、社会のニーズに応えようとしているが、センターの教員はセンター育ちだから、社会のニーズを知らない。これまでは不変の姿勢で、変わる市場ニーズに対応しようとしてきたが、実は、仕事に追

われていたせいもあって、センターの位置づけや、これから求めるべき方向性について、あまり考えていなかった」

しかし、曹さんたちも、現状のままではセンターの役割が世間に認められないままに終わるのではという懸念をもち、現状打破の手がかりを模索しようとしている。その試みのひとつが、日本語、日本文学、日本社会、日本文化というこれまでの4コースを、日本語学と日本語教育、日本文化と日本文学、日本社会と日本経済という3コースに改めるというものだ。新設した「日本社会と日本経済」コースで変貌する中国社会のニーズに応えようとしている。さらに、日系企業の進出に焦点を当て、日本の企業文化などを取り上げようと考えている。

大平学校で懸命に日本語を勉強していた1期生の仲間が、大平学校の跡を受け継ぐ日本語研究センターで、汗水をたらして後輩を育てている。そして、どうすれば大平学校が植えた日中交流の太木が永遠に緑を保てることができのかと考え、苦悩している。

大平学校の卒業生たちを追う取材の旅が終わり、日本に戻る飛行機に乗り込んだ。取材を通して、日中交流が大

きな転換期を迎えつつある時代の息吹を肌で感じた私は、取材現場で覚えた高揚感を静めることができなかった。なぜなら、曹さんたちの悩みは、大平学校の1期生の私にとつても、同じく重いテーマであるからだ。新時代に相応しい日中交流のあるべき本流を探し求める新しい旅路に、これから自分がつこうとしているのを感じた。



北京日本学研究センター。1985年、北京外国語大学内に開設された